

いなほ

第79号

2018年8月20日 URL <http://www.mo-e.jp>

NPO 法人 萌

代表 波多江伯夫

横浜市中区深谷町 893-2

B 型事業所

工場 いなほ

相談支援事業所 ふかや

グループホーム 独歩

TEL 045-443-7416

新たな課題

発達障害は自閉症スペクトラム、注意欠陥多動性障害 (ADHD)、学習障害が主要な障害であるが、第四の発達障害として子供の虐待を取り上げているのが児童精神科医杉山登志郎である。2016 年度の虐待数が 12 万人を超えたことが報道されたが、26 年間連続の増加で深刻な状況となっている。虐待は身体的虐待、ネグレクト (育児放棄)、性的虐待、心理的虐待 (面前の DV も含まれる) である。長期に虐待を繰り返し受けた子供たちは、幼児期には養育者との基本的な信頼関係が結ばず、学童期に ADHD 様の多動・破壊的行動、フラッシュバックや驚愕反応などの過覚醒症状を呈する心的外傷後ストレス障害 (PTSD) が現れ、青年期には交代人格の解離性障害や犯罪に走る行為障害が出現して、未治療が続くと感情調整の不全、自傷行為、怒りのコントロール不全などの複雑性 PTSD となる可能性が高い。虐待の後遺症は発達に応じた様々な障害を生み、異型の連続性という特徴があるといわれている。被虐待児の脳検査で、感情を司る扁桃体の体積が減少し、感情を調整する神経伝達物質のセロトニンも減っていると報告され、脳機能の低下となっているらしい。

虐待をする家族は孤立家庭や低所得家庭が多いと言われている。格差社会の弊害も垣間見える。虐待する親の一部は、親自身が虐待を受けていた経験があり、被害者が加害者となる世代間連鎖の問題を抱えている。また障害を持った親もいて複雑である。それでも幸いなことに、70%の親は世代間連鎖を断ち切って立ち直っていることも報告されている。

私たちは成人障害者の支援団体で子供の支援をしているわけではない。就労や相談支援をしていると、複雑な家族と出会うことが多くなってきた。障害者総合支援法は、障害者本人の支援で家族支援の項目はない。自分たちで支援の在り方を模索しなくてはならない。家族の病理が諸悪の根源とは言わないが、家族の在り方や価値の多様化もある中で、親の欲求を優先し子供をおざなりとしているという指摘もある。悩める家族の生きづらさが伝わってくる。

みなさん夏休みはどう過ごしましたか？

Ki です。僕は所長のお誘いを受けて一人暮らしの方々中心のメンバーで、西丹沢大滝キャンプ場でバーベキューをしに行きました。大自然の中でのステーキは格別においしかったです、ステーキはシェアにかぎります。

Is さん お盆でお墓参り。

Ao さん うちで寝てた。

Ya さん いとこたちと琵琶湖近くのエクシズというホテルに泊まった。

Ar さん 子供たちと横浜スタジアムで野球観戦。

Ri さん 父の実家のある町田の夏祭りに行った。



Su さん 茨城のお寺に行った。

Sa さん スシローに行きました。

Wa さん 家にいました。

Se さん 横浜をフラフラした。

Og さん 麦茶と枝豆を食べながら高校野球をみました。

Oz さん 一人で群馬に日帰りバス旅行に行った。

On さん 新横浜のキュービックプラザに行きました。

Sa さん ランドマークタワーのサンリオショップに行った。

Oc さん 家でゴロゴロ。

Ok さん 単身赴任の母に会いに浜松にいきました。

ご協力ありがとうございました K I



青葉区 竹林整備***ようやく終わり。

約1か月かかり、頼まれていた竹林の整備が終わろうとしています。職員が二人取られ、粉碎機も湿った、倒れている竹を粉碎したため、壊れました。修理代等入れると、結局、差し引きゼロ円で収益のある作業にはなりませんでした。改めて、見積もりの取り方を考えなければと思わされた仕事でした。みなさん暑い中ご苦労様でした。



☆ 8月13日西丹沢の河原で ☆

一人暮らしをしている方を対象にした、バベキューをやりました。ステーキも焼きました。萌の会員の方たちの会費をあてさせていただきました。



萌の歴史5 10年の谷間に合ったものは何か？私たちの失敗

NPO法人は普通何かの運動体を母体にして作られることが多い。萌は運動体を持たず、A型を立ち上げるために作られた経緯がある。これが、10年たちあだとなっている。私たちは後継者の育成に失敗した。私たちが60歳を超え、身体的にこの職業を続けることが出来なくなるという事を、想定してこなかった。いつまでも元気に仕事をできると思い込んだことが誤りだったと思う。いざ、振り返ると後継者がいなかった。私たちが不在となったら、萌の支援や在り方は引き継がれていくだろうか？萌を創設したときの、既存の福祉や当事者の思いを尊重していない福祉現場の在り方へのノンという強い思いは残るだろうか？運動体ではないから、討論や思いを語る場を作ってこられなかった。

熱く自分の支援の在り方や、今の福祉制度の問題を語る場を持ってこなかった。理事会は理事のえがくそれぞれの「福祉」という言葉を、個々が持ち寄っているにすぎなかった。萌の経営理念がどこまで本当に理事会に共有されていたかは疑問である。A型の時は、赤字続きの萌の経営をどうするかが重要課題に。そして、長年の赤字が黒に転化した今年、創設当時からいた理事がほとんどいなくなっていた。もうあの苦しい時期を知っているのは、理事長と私だけになった。

鳥は空へ 魚は水へ 人は社会の中に 私たちはともに 共に自分らしく生き
こころ豊かなる未来を実現します この行間にある思いは是非引き継がなければ
ならない。残された時間は無限にあるわけではない。つづく

グループホーム独歩から

1名の入居者が自宅に戻ることになりました。彼は、どうしても、自宅への頻繁な無断帰宅を辞めることが出来ませんでした。独歩の世話人は8時半には勤務終了。それ以降は、入居者の動向を把握するのは無理です。最低限ホームで寝泊まりするというルールが守られず、通っていた日中支援先にもいかず、昼間はどこかへ出かけてしまうことが続きました。初心に立ちかえり、独歩はどういう生き方をしたい人の場か考え、自宅に戻しました。私たちのホームは、地域で一人で生きたいという思を抱く人たちの場です。その思いをないがしろにすることはできません。



グループホームの世話人には70代の方がいる。おかげでリビングには花が絶えない。大切なことである。